

【社会】

寅さん会館もう一度 ファン「守らなきゃ」

2015年5月23日 夕刊

長野県小諸市で休館中の「渥美清こもろ寅さん会館」が来春、再開できる見通しになった。映画「男はつらいよ」の台本や衣装、国民栄誉賞の盾まで俳優・渥美さんゆかりの千七百点が集まる。「日本芸能史の貴重な資料の宝庫」とも言われるが、経営難で二年以上閉じていた。再開に至る道には、渥美さんと小諸の人たちをめぐる物語があった。（森本智之）

オープンは一九九五年。地元で小さな電気工事会社を営んでいた故井出勢可（せいか）さんが館長を務めた。



小諸市内のそば店を訪れた渥美清さんと井出勢可さん（右）＝1988年ごろ（そば店「古城軒」提供）

井出さんが渥美さんと出会ったのは七三年、四十六歳の時。東京・小岩のスナックで、なじみのコメディアン関敬六さんから紹介された。同い年の二人はすぐうち解けた。井出さんは仕事を休んで「男はつらいよ」のロケを追っ掛けるようになる。渥美さんにとっても心を許せる数少ない親友になった。「撮影の合間に渥美さんの話し相手になってほしい」とスタッフ側から呼び出されたほどだ。

ポスターや小道具など寅さんに関するものは何でも集めた井出さんは「いつか渥美さんの会館を造る」と夢見た。渥美さんは何も言わなかった。ただ、ある時「トラックで撮影所に来て」と告げられた。駆けつけると、大量の段ボール。中には渥美さんの所有品がぎっしり詰まっていた。

井出さんの一人息子の竹弘さん（55）は脳性まひの障害がある。そのことを渥美さんもよく知っていた。「会館があれば将来お父さんがいなくなっても働ける、と案じてくれたようです」。妻の澄子さん（81）はおもんぱかる。周りは知らなかったが、渥美さんはこのころ既にかんと闘っていた。

渥美さんは開館の翌年の九六年に亡くなった。開館式典には、入院先を一時退院してまで駆けつけた。

寅さん会館は九七年に十二万四千人が訪れるなど滑り出しは順調だった。竹弘さんは受付に座り、両親と働いた。だが、入場者はその後大きく落ち込む。井出さんが二〇一二年十月に八十四歳で亡くなると、直後に休館が決まった。最後の一年間の入場者は七千六百人。翌春に運営会社は解散し、展示品は建物ごと市に寄贈された。長年の赤字で、開館時に出資者から集めた一億二千万円は底をついていた。

「赤字施設」の処遇に市も頭を悩ませ、展示品を県外の業者に売却する話まで持ち上がった。その

渥美清さんと井出勢可さんの友情が詰まった「渥美清こもろ寅さん会館」＝長野県小諸市で

時、声を上げたのが市内で観光人力車を引く一井（いちい）正樹さん（34）だった。以前の勤め先になじめず、自宅に引きこもっていた二十代のころ、テレビで偶然見たのが「男はつらいよ」だった。

「優しくて温かい寅さんは大げさでなく勇気をくれた」。まだ開館していた寅さん会館を訪ねるようになり、井出さんと渥美さんの友情を知った。

一井さんはファンの仲間らと会館の再開に向け、署名集めや映画上映会などの運動を始めた。

寅さんの衣装を長年担当した本間邦仁さん（67）も仲間に加わった一人。昨春衣装会社を辞め、東京から移り住んだ。「渥美さんは井出さんやたけちゃん（竹弘さん）を思って会館を残した。守らなきゃいけない」

今年五月、一井さんらは市から会館を無償で借りる権利を得て、再開のめどが立った。だが、市の支援はなく、運営費用は自分たちで賄わなければならない。道のりは険しいが、一井さんは「苦労は覚悟の上」と意気込んでいる。



渥美清さんと井出勢可さんの友情が詰まった「渥美清もろ寅さん会館」＝長野県小諸市で